巻　頭　言

平成25年度は、前会長の国際教養大学の勝又館長から、非常に大きな仕事を引き継ぎました。総会でもお諮りしたとおり、それまでの内規を廃止し、新たに会則を制定するというものです。これまでの長い歴史を持つ本協議会に、会則が無かったことに驚くとともに、必要なことを一つひとつ積み重ねて来た諸先輩のご苦労が窺えます。法人化という変革が進む中、新しい公立大学の図書館協議会として、会則の議論がこのタイミングでできたことは、意義を感じます。また、それに伴い、役員選任手続細則や会計手続細則等、幾つかの細則を設けることになりました。役員の各館の皆さんには、高知にお集まり頂く以外にも、メール審議を幾度となく繰り返し、議論をして頂きました。この場をお借りして、厚くお礼申し上げます。この様な二年間の一連の活動により、新しい公立大学協会図書館協議会の基盤整備が、可なり進んだと思います。

さて、一応の基盤整備が出来たところで、これから何を目指して協議会は活動を進めて行けば良いでしょう。コンソーシアムの統合や東日本大震災の支援など、本協議会は時代の流れに対応して、事業を展開して来たと思います。最近の流れである、ラーニングコモンズやアクティブラーニングに少し触れてみたいと思います。実は、高知県立大学は、平成27年度から隣の高知工科大学と法人統合し、3つあるキャンパスの1つでは、図書館を共用して運営して行く予定です。残念ながら、当初の計画より小振りの図書館にはなりますが、改革の良いチャンスと捉え、ラーニングコモンズやアクティブラーニングを意識した図書館づくりを議論して来ました。ラーニングコモンズの日本語訳は幾つかありますが、例えば学びのための共有の場、とでも訳せるでしょうか。静かに、重厚な専門書を一人で読む環境から、一人ではなく複数で学びのための場を共有するイメージは、それまでの図書館とは可なり異なると思います。このパラダイムシフトを、我々はどの様に受け止めればよいでしょうか。高知県立大学の総合情報センターは、12年前に図書館と情報センターを統合して発足しました。この様な動きは、当時幾つかの大学でも同様に見られ、我々も紙の情報と電子情報の相互補完とそれによる価値創造を目指し、新たな学びの場作りを試みました。しかし、運営組織は統合したものの、具体的な学びの場の創造には至りませんでした。当時、恥ずかしいことにラーニングコモンズの概念も知らず、とにかく二つの組織の統合のことばかり考えていたと思います。この様な改革は、具体的な環境の変化が伴わないと、なかなか進まないと思います。前述の新しい図書館の建設が、本館にとっては大きなきっかけとなっています。しかし、本館同様多くの大学では、このような図書館の新設は、何十年に一度のチャンスなのかもしれません。巡って来たチャンスを、十分に活かせる様、目の前の改革を確実に具現化したいと思います。

平成26年3月

公立大学協会図書館協議会
会長　高知県立大学総合情報センター長
山田　覚